
空色@

水銀。杏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空色@

【Nコード】

N9895Y

【作者名】

水銀。杏

【あらすじ】

短い人生、後悔はしたくないじゃない？私が全ての中心を生きて、生み出していく。自分らしい生き方を作りだしていく話。

プロローグ（前書き）

少しリアリティーな作品になると思います。
語り手が主人公か第3者？バラバラですが、気にしないでください。

プロローグ

人間は『人生』を何と例えるか？

誰もが『人生』という名の物語の主人公であって、

自分を軸に物語が進んでいるんだ。私の寿命は他の人より短い。

誰にも変えさせない。邪魔させない。後悔しないように生きてやる。

空色@(ドットコム)

この物語の主人公である美空 陽は、

幼い頃から自意識過剰な性格のせいか、哲学的な考えをよくする子であった。

「私は上手な絵を描くことが出来る！自分は天才だ！」

「忘れ物なんかしたことはないよ！偉いから！」

…など、自分が1番という考えしかなかった。

その性格は変わらず、大学受験の際は、

「都会の大学のほうが、私らしく勉強できると思うんだ」

家の周りが田んぼだらけのような田舎に住む陽は、親の反対を無視して、

都会の大学に進学することになった。

月日は進み、大学3年生。桜の木に緑の葉が目立ってきた時期。

勉強一筋の1・2年生の時に比べ、結構楽になってきたキャンパスライフ。

勉強内容はあまり変化がないので、月に数回提出するレポートに力を入れた。

今日の授業も終わり、別校舎の4階の奥の教室へ向かう。

ここは空き教室であり、陽が参加しているサークル『バカンス』の活動室。

活動内容は特になく、教室内なら何をしてもいい。

本を読んでもいい、絵を描いてもいい、音楽を演奏してもいい、昼寝でもOK。

自分が好まないことに縛られたくない陽にとっては、十分なサークルだ。

「こんにちはー」

教室のドアを開けると、サークルのメンバーが揃っていた。

4年生の優美先輩、桃子先輩、光先輩。

2年生の十夜君と翔君。

1年生はいない。そして、

同じ3年生の雪野愛理。学部も一緒ってこともあって、大親友だ。

人数は私を入れて7人しかいないが、その分仲良しだ。

「陽、今日どうする？やることないなら、レポート仕上げちゃう？」
愛理が私にプリントを渡してきた。

「そんな気分じゃないんだよねー。あ、」

目の前にある黒板を指差し、

「一面に落書きしたい気分！」

「…お、おう！」

人生を後悔したくないの。

嫌な思いなんかしたくないの。

やりたいことだけしかしない、そんな生き方をしたい。

そんな、…お話。

プロローグ（後書き）

次話 12月4日（10時）
誤字・感想等受け付けます。

1・忙しいとはなんぞや（前書き）

長くなったので、1つの話を前半と後半に分けます。
これは前半です。

1・忙しいとはなんぞや

夜7時半。

陽は学校では常に一緒にいる親友である愛理と、サークルの教室でお喋りをしていた。

先輩達、後輩達は帰ってしまった。

「陽、バイト8時からなの？」

「うん」

「途中まで一緒に行く」

「んー」

空のペットボトルをゴミ箱に捨て、教室を出て、鍵を掛ける。

1階の事務室に鍵を預け、学校から出る。数分行ったところにある商店街。

入り口の近く、陽のバイト先の小さい居酒屋がる。

どの料理も美味しくて値段も安いのに、客は常連のサラリーマンだけ。

「頑張つてね、バイバイ」

「おやすみ」

愛理に手を振り、裏口から入る。

この店は自営業で、50代の夫婦が切り盛りしている。

大学1年生の陽が初めて店に来た時、夫婦の人柄を気に入り、ここでのバイトを申し込んだ。

3人だけでも人手に余裕はあったが、

「!?!」

「あ、もしかて陽ちゃん?こんばんわ!」

控室に知らないおっさんが立っていた。

「おばさん!あの人誰!?!」

「ここら陽ちゃん、人を指差さないの。これ3番テーブルに運ん

でね」

「えー。シカトですか？」

「今日から働くことになった加藤さん。料理が上手なんだ」

「…」

「急遽お金がいるみたいでね…住み込みで働くことになったよ」

頭の毛が薄いのに、付け合わせのキャベツの千切りをしたり、酢の物を作っている。

（40後半ぐらいかな…手先は器用なんだな。私の方が上手いけど）
「もつ煮と、生2ですねー。お待ちどー」

顔が真っ赤な2人組のサラリーマン。テーブルに置くと、

視界に別のテーブルにいるサラリーマンが手を上げていることに気付く。

「ご注文をどうぞ！」

「レモンハイと牛肉コロッケと…唐揚げ」「あと生1つ」

「少々お待ちを」

カウンターにメモを置いた瞬間、加藤が駆け寄ってきた。

注文をつぶやき、冷蔵庫からコロッケの具を取り出す。

「あ」

揚げ物は陽が担当していた。他にも注文とレジをやっている。

「おっ……、加藤さん！それは私がやるんで、酒を…」

「いいよいいよ。あ、洗い物が溜まってきてるから、それをやるといい」

加藤は成型をし、揚げ始めている。

陽は頭に来た。決められたことしかやりたくないし、

まず、新人である加藤に命令されたことに腹が立った。

無視して冷凍になっている唐揚げを取り出すが、加藤に取られてしまった。

「俺がやるから、洗い物しなって」

手の甲を向け、陽を追い払う。

その行為に苛立ちを覚え、唐揚げを奪う。

「いくら年上でも、なんでハゲ散らかった奴に命令されたくない！」

「ちよ……」

「……陽ちゃん？」

陽の声は厨房内で響いた。

「おっさんが洗い物をすればいいですしおすし……！」

陽はおばさんに軽く頭を下げ、店から出て行った。

1・忙しいとはなんぞや(後書き)

次話(後半) 5日(10時)

誤字・感想等受け付けます。

2・扱いとはなんぞや(前書き)

1の後半です。

文字数は多いですが、会話が主なので読むのは普通だと思います。

(?)

2・扱いとはなんぞや

我を忘れて店を飛び出してしまった…。

たまに注文が多くて逆ギレすることはあるが、こんなことは初めてだ。

おばさんとおじさんになんて謝れば…うーん。今は後悔している。

店に戻ることも出来ず、商店街を4往復してしまった。

…いい加減家に帰ろう。もうだめだ。

商店街を出たところに交番がある。

若い警察官と目が合い、何故か敬礼する。

「どうしたんだい？元気がないね」

「バイト先で喧嘩しちゃって…」

「ハハ…。パトロールまで時間あるし、話聞こうか？」

「マジっすか」

中に入り、机を挟んで警察官の真向かいにあるパイプ椅子に座る。

おばさんとおじさんには悪いことをしたと思ったが、

加藤には何の感情も浮かばない。

「思い出すだけで、腹が立ちそうぞ」

「謝りに行った方がいいだろ？」

「…そうですかね」

陽の愚痴を聞き、警察官は時計を見た。もうすぐ23時になるところだ。

「まだ店はやってるだろうけど、今日は帰りなさい。明日でも大丈夫だろ」

「うん。優しいお巡りさんだね。…名前は？」

「？…真城ましろだ。よろしく」

「またお世話になりそうだから覚えとくね」

ニッコリ笑いながら、交番を出た。

入り口の近くにある掲示板。そこには指名手配犯の写真が並ぶ。陽の住んでる町は都心より少し離れていて、治安がちょっと悪い。手配書の中に、見たことのある顔があった。

(あれ…?)

その写真の頭の部分を手で隠す。

「!??」

(加藤の顔だ! あいつ、ヅラを取って居酒屋に潜り込んだのか!? そういえば住み込みって言うってたな…おばさん達が危ない!)

「真城さん! 私この人知ってる!」

「え!? こいつは最近この辺りに潜伏している殺人犯だ! どこにいたんだ?」

「さつき話した居酒屋だよ!…どうしよう」

「場所は分かるから、陽ちゃんはお店に電話して!」

真城は自転車で店に向かう。陽は電話した後、店に向かった。

着いた時には店前にパトカーが停まっており、加藤が逮捕された。

次の日、加藤のことはテレビニュースで放送され、陽は満足した。もし自分が気付かなかつたら、おばさん達は殺されてたかもしれない…。

そう考えると、自分は何か凄い人なんだと思ってしまう。

朝7時。まだ警察によって調べられてる中、店に足を運ぶ。

おばさんは何事もなかったように許してくれた。

私はすぐにサークルの教室に行き、ポスターを書いた。

「文学部所属、美空陽! 犯人を逮捕する!…ドヤ!」

数十枚印刷し、学校の掲示板や階段の踊り場などに貼っていく。

それを見たのか、愛理が電話してきた。

「これ本当? 陽凄じゃん! どこにいるのー?」

愛理と合流し、ポスター貼りを手伝ってもらった。

同じ学部の子からの驚きのメールや電話が次々と来る。

授業中も携帯が鳴りっぱなしで、いい気分だ。

午後の授業が終わり、サークルの教室に向かう。

すると、生徒会の人たちが群がっていた。

「まさか！生徒会新聞とかのネタにするつもりですかあ？うふふん」

「…ポスターの貼りだしには生徒会の許可が必要です。なので、

このポスターの廃棄をお願いします」

机の上に、貼ったポスター数十枚が並べられた。

「……………え？」

2・扱いはなんぞや(後書き)

次話 8日(10時)

誤字・感想等受け付けます。

3・変な感じがする(前書き)

1つの話が長いので前半と後半と分けます。
前半です。

3・変な感じがする

「…好きです!!」

「…No, Thank you」

2年生である風見十夜は、陽のことが好きであった。

サークルなどで2人つきりになったりすると、必ず告白する程好んでいる。

だが、陽は彼氏という存在を欲しいと思っただけでいい。まず興味がない。

「陽先輩…。今日は帰ります」

「気いつけて帰れよ」

十夜が教室を出ていくと、陽1人だけになってしまった。

数分後、優美が入ってきた。

「あれー？他の皆は？」

「十夜は帰って、あとは授業ですかね？」

「……また告られたの？」

「…」

頭で返事をした。陽は優美のみに相談していた。

他のメンバーに話して、バラされたら大変だと思ったからだ。

「試しに付き合ってみたら？」

「…好きになれるか、分からないですよ」

「言っただけなのかな…。私、十夜からも相談受けてるの」

「そうなんですか？」

「それで…なんだけど」

これは優美先輩が聞いた話。

十夜は高校生の時、当時付き合っていた彼女が事故で亡くなったらしい。

その彼女が私に似ているみたいで、初めて会った時に運命を感じた

という。

私はそれを聞いて黙ってしまった。そんな思い入れがあったとは…。「でも、彼女と私は違っし…。付き合っても、十夜が幸せになれるわけじゃない」

今日はバイトがなかったから、真つすぐ家に帰った。

昨日の夜作ったカレーが残っている。温めて食べようぞ。自然の流れで携帯を開いた。

「あ」

十夜からのメールだ。毎日のように届く告白のメールで、しかも長文。

いつもなら「ヤダ」とか、「今度ねー」って断るんだが、今日は送る気がなかった。

「メール返さなかったら、十夜心配するかな…?」

携帯を見えないところに置き、カレーライスを食べる。

録画していたドラマを見て寝ようと思ったが、また悩んでしまう。

十夜と付き合おうが、ずっと断り続けようが、

「天国の彼女に恨まれるだろうな…」

すぐに寝つけず、悩み続けた。

その結果、知恵熱が出てしまった。

3・変な感じがする(後書き)

次話(後半) 9日(10時)
誤字・感想等は受け付けます。

4・恋な感じがする(前書き)

1つの話が長いので分けました。

これは後半です。

読む方は前半を読んでからのほうがいいです。

4・恋な感じがする

頭が重い…。ちよつとたるいかも。

少し顔が赤いぐらいで、咳や鼻水は出ない。知恵熱かな？

学校に行く元気がないため、愛理にメールをすることにした。

携帯を開くと、十夜からのメールが何十件も来ている。

可哀そうになってきたから、愛理と同じ内容を送った。

「光先輩！今日、陽が熱出して休んだんですよー。なんか寂しかったなあ」

「陽ちゃんが！？珍しいー」

「…」

「十夜君、どうしたの？」

愛理は机に伏せる十夜を見つける。

「陽先輩が心配で…」

「知恵熱だってね。明日にはちゃんと来るよ」

「重度な病気だったらどうするんですか？…お見舞いに行ってきたす」

「…は？」

「愛理先輩、陽先輩の家教えて下さい」

十夜のテンションが明らかに暗いので、愛理はとっさに教えてあげた。

十夜が出て行くのを見送ると、入れ違いで優美が入ってきた。

愛理は優美に簡単な説明をすると、

「これが…恋の力さ」

「「?????」」

ピンポン

「はーい。…十夜！」

「陽先輩！大丈夫ですか？」

「熱は下がったけど……！」

陽は何かに気付き、ベッドに戻った。

それを追うように部屋の中に入る十夜。

「なんで入って来んの？帰りなさいよ！」

「俺は先輩が心配で……」

陽は恥ずかしかった。だらけたスウェット姿。ボサボサの髪。ノーメイク。

いくらなんでも女としてみっともない格好なので、掛け布団で覆い被る。

だが十夜の気配は消えず、ベッドの隣に座る音がした。

「…先輩、熱が出たからメール送れなかったんですか？」

「…ごめん、な？」

「いえ……」

無言が続くが、十夜は帰ろうとしなかった。

陽は出るに出れず、眠くなっていき、いつの間にか寝てしまった。

朝、目が覚めると十夜の姿は無かった。

テーブルにはサンドイッチと風邪薬が用意されている。

「十夜……」

時計を見ると、1限が始まってる時間だった。

携帯には十夜からのメールがない代わりに、愛理からのメールが来ていた。

頭をボリボリ掻き、返信の内容を考える。

「『サークルの時間に行く』…と、あと……」

最後に文を足し、のんびりと学校に行く準備をした。

5時過ぎ、

「こんにちわー」

「皆さん早かったですねー……！！陽先輩!？」

サークルの教室にいたのは十夜ただ1人。私が愛理に頼んだからだ。十夜は何故か机の上に置いてあるゲーム機やお菓子を片付けた。

「もう熱のほうは？」

「大丈夫だよ。…色々ありがとね」

「先輩のためになれたなら…」

照れる十夜に、陽は笑った。嬉しくなってしまったから。

「自分のためだけじゃなくて、十夜のためにできたらな…」

「？」

「なんて言うか…。自分の『好き』と十夜の『好き』とは、価値観は全然違うでしょ？」

「……先輩」

亡くなった彼女もそう思っているだろう。これがコイツの幸せなんだって。

「男に免疫が無いからアレだけど、十夜が私を好きでいてくれるなら、付き合おうか？頑張るから」

「え？…本当ですか先輩！？やったあ！！」

飛び跳ねながら喜ぶ姿はまるで子供のようで…。

そして、ドツキリのようにサークルメンバーが入ってくる。

たとえどんな相手でも、私みたいに男嫌いでも、

十夜が好きになった子と付き合ってほしい…。それが彼女の願いだと思った。

4・恋な感じがする(後書き)

次話 12日(10時)

誤字・感想等受け付けます。

10日(21時)に

連載『姫の気まぐれ』を投稿します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9895y/>

空色@

2011年12月9日11時55分発行